

菅、前総理細野、政調会長枝野ら

山際澄夫

ジャーナリスト



「弁解本」の厚顔無恥

やっと衆院が解散した。総選挙（二月十六日投票）では、消費税増税や原発の是非などのエネルギー問題、それにTPP（環太平洋戦略的経済連携協定）への参加の是非などが争点になると報じられている。

だが、待つてほしい。真っ先に問われなくてはならないのは、三年四カ月に及んだ「民主党政権そのもの」であることはいまでもない。

民主党は出来もしない「マニフェスト」で国民を欺いて政権を獲得しており、それだけでも政権交代は必然だ。

さらに深刻なのは、日本経済が活力を失い、尖閣諸島や竹島など領土が脅かされていることだ。これらはいずれも、民主党政権の失政が招いたことなのである。

反目的な党の体質も露呈した。三年前の総選挙で在日韓国人組織「民団」の選挙応援を受け、前原誠司元外相に次いで、菅直人首相、野田佳彦首相の二代の首相が在日韓国人から献金を受け取っていたのである。

だが、そうした諸々の問題にも増して悔やんでも悔やみきれないの

が、東日本大震災を民主党政権下で迎えたことである。東北に行ってみてほしい。信じられないことに、被災地の復旧復興は一年八カ月を経たいまなお、遅々とした歩みでしかない。原発事故を伴った福島県では、十五万人の被災者が故郷へすら戻れない。

この日本人の悲劇を政権の延命に利用し、被災者を「見殺し」にしたのが時の首相、菅直人氏である。

レトリックではない。東日本大震災では、地震や津波を逃れ



閣僚、党幹部が続々刊行！ 恥を知れ！

ながら避難先の環境の悪さや将来への希望を失って自殺する震災関連死が多いのである。

原発事故に見舞われた福島県では、放射線の急性被曝による死者は一人もいないのに、震災関連死は一

千百人に達している。これが政治の責任でなくて何だろうか。死者の無念を思えば、菅氏は刑事責任を追及されてもおかしうはない。菅直人氏こそ国家の敵である。

ところがここに来て、菅直人氏と元閣僚らによって書かれた「菅政権の対応は間違っていないかった」という類の書籍の出版が相次いでいる。

菅政権の閣僚らによる出版ラッシュは、国会事故調査委員会を最後に各種事故調の報告書が出揃った八月以降である。端から、民主党政権の取り組みを正当化し、今度は「脱原発」で国民を騙そうとの魂胆が見え見えだ。

口火を切ったのは震災当時、官房副長官だった福山哲郎氏が八月十日に出した『原発危機 官邸からの証言』(ちくま新書)。

次いで、首相補佐官から原発事故

収束担当相を務め、いまや民主党の顔となった細野豪志氏の『証言 原発危機500日』(八月二十七日、講談社)、さらに元官房長官、枝野幸男氏の『叩かれても言わねばならないこと』(十月十一日、東洋経済)。

そして、菅直人氏自身の手になる『東電福島原発事故 総理大臣として考えたこと』(十月二十五日、幻冬舎新書)、また、経産相だった海江田万里氏の『海江田ノート 原発との闘争176日』(十一月二日、講談社)と続いた。

自己弁護と責任逃れ

タイトルをみて分かるとおり、どれも政権として、また政権のキープレーヤーのひとりとして原発事故にどう取り組んだのかという体験を綴ったもので、いずれも今後のエネルギー政策として「脱原発」を主張して

いるのが特徴だ。

その内容は、あれだけの惨事なのに自画自賛、弁解、責任逃れに満ち満ちている。思ったとおりだが、民主党政権の酷さは分かっている。でも、その厚顔無恥さはいくら驚いても驚き足りない内容なのだ。

玄海原発の再稼働をめぐる海江田氏が菅氏に恨み事を言っているのを除いては、菅首相のハンドリングを絶賛している。しかし、内容とはかくとしても、昨日まで国家中枢にいた政治家が、まだ続いている、しかも日本の安全保障にも直結する原発危機対応という最高レベルの機密問題でこうもぺらぺらとしゃべっているものだろうか。

閣僚らはあえてこの時期に出版した理由について、〈官邸という意思決定者側からみた記録を伝えることは歴史的な意義がある〉(この本は歴史の法廷における私の陳述書)(細野

『証言』などと、一様に「歴史」を強調している。

菅氏も(退任直後から、原発事故に遭遇した総理として、記録を残すことが必要だと考えていた。政治家の行動・仕事を評価するのは私ではない。評価は最終的には歴史に委ねるしかない)と思っている)というのだが、それなら原子力災害対策本部や緊急災害対策本部などの重要会議の議事録をなぜ作成しなかったのか。

法で定められた議事録すら残さず、そのことの釈明もしないで歴史を強調するのは、これが選挙目当ての自己正当化本だからである。

過剰な現場介入

菅直人政権のデタラメさは、福島第一原発事故を〈「自然災害」ではなく「人災」〉と断じた国会事故調査委員会の最終報告にも明らかだ。

〈官邸政治家は真の危機管理意識が

不足し、官邸が危機において果たすべき役割についての認識も誤っている)〉

〈総理の福島第一原発の視察も含めた官邸の直接介入が、指揮命令系統の混乱、現場の混乱を生じさせた〉

〈官邸政治家は、発電所外における住民の防護対策に全力を尽くすべき官邸、政府の役割を認識せず、第一義的に事業者が責任を負う発電所内への拙速な介入を繰り返した〉

菅首相を中心に菅政権の閣僚らが現場に過剰介入して指揮系統をずたずたにし、現場を大混乱に陥れた。換言すれば、「菅元首相こそが人災の元凶」だと指摘しているのである。

そして、政府にとって最も重要な使命であるはずの住民の避難指示が疎かにされ、被災者に過酷な運命を与えたと結論付けているのである。

実際に菅氏の介入は、現場の混乱を拡大しただけだった。最終報告書

で確認されているのは、次のような事実である。

地震発生の平成二十三年三月十一日、一分一秒を争う初動で、原子力非常事態宣言の発出が二時間も遅れた。宣言の発出を求めた海江田経産相に対して、〈菅総理が技術的な原因や法的手続きにこだわり、緊急事態宣言を発出したまま席を外した〉のが大きな理由だ。宣言の発出は、原子力災害対策本部づくりなどすべてに対応の基本となるものだった。

この間、福島第一原発一号機では炉心損傷がはじまり、必死の復旧作業の最中だったのだから罪は深い。

翌日の三月十二日未明に、首相が福島第一原発を自衛隊のヘリコプターで視察したのも、現場作業の妨害としかいえなかった。

細野氏は〈総理の視察がベントを遅らせたことはなかった〉(細野『証言』)

と説明しているが、そんなはずはありまい。

当時、「福島第一原発の地震重要棟では仮眠する作業員が通路にまで倒れ込む野戦病院のような状況だった」と菅氏自身が書いている。そのなかで、一向に進まぬベントに取り組んでいたのである。直接的な影響はともかく、首相の訪問が現場の新たな混乱材料になったのはたしかだろう。

滑稽なのは、ベントや海水注入はいずれも現場が必要性を認めて自発的に取り組んでいたものだったことだ。それを福島第一原発の現場に電話を入れるなどして余計な指示を連発したのが、菅氏の手下である官邸政治家である。

たとえば、海江田経産相は官邸内で〈君たちがいつまでもベントしないなら「命令にするぞ。命令にするぞ」(福山『原発危機』)と東電関係者に

詰め寄り、実際、その直後に海江田氏はベントの措置命令を出している。

現場は「放射線量が高い」「マニュアル書が明確でない」など、さまざまな理由からベントを手動で行うことに悪戦苦闘していたのだが、措置命令となったのは、閣僚らが「東電はベントを拒否しているのではないか」とまで疑心暗鬼を募らせた結果だった。

「死んだっていいんだ」

原子炉への海水の注入も、現場は自発的に開始していた。ところが官邸では、菅首相が技術的質問をするなどしてゴーサインを出さないため、官邸に詰めていた東電関係者が首相の意向を忖度し、第一原発に注入の中止を求めるなどして混乱に拍車をかけた。

しかし、現場はこれを見做すこととで何とか注入を続けることができ

たのである。一事が万事、この調子だった。何もかもが素人の思い込み、思いつきで現場に介入しては混乱させたのである。

この過剰な介入の結果、本来なら福島第一原発の現場を支えるべき東電本店が〈官邸の顔色をうかがいながら、むしろ官邸の意向を現場に伝える役割だけの状態に陥った〉という。

福島原発事故の被災の大きさを考えれば、笑ってすませるわけにはいかない。犯罪的な対応だったのである。

両者の不信感の溝は、事故発生数日で越え難いものになっていった。

その双方の不信が招いた決定的な出来事が、三月十四日夜から十五日朝にかけての、東電の福島第一原発からの撤退話に菅首相が反応して東電本店に乗り込み、感情にまかせて東電幹部を怒鳴り散らしたあの事件である。

事件の伏線は、「東電が福島第一原

発から全面撤退しようとしている」との海江田経産相らがもたらした情報だった。

「全面撤退」は、菅首相らの勘違いだった可能性が濃厚だ。東電で考えられていた撤退は、第一原発に緊急対応班を残して、残りは第二原発に引くというものだった。

しかし、いつのまにか首相の執務室で官邸政治家が協議するうちに全面撤退が確定情報となり、菅首相は未明になって東電の清水正孝社長を官邸に呼びつけた。

そして、一方的に「撤退はさせない」と通告し、東電本店に政府と東電の事故統合対策本部の設置を了解させた。その後、早朝に菅首相が東電本店に乗り込んで東電幹部に言い放ったのが、以下の罵詈雑言である。

国会事故調の最終報告書の〈東電社員が残した記録〉によると、菅首相の発言はこんな具合だったという。

〈被害が甚大だ。このままでは日本が滅亡だ〉

〈撤退などあり得ない。命がけでやれ〉

〈逃げてみたって逃げ切れないぞ〉

〈六十になる幹部連中は現地に行つて死んでもいいのだ。俺もいく〉

〈社長、会長も覚悟を決めてやれ〉

とことん品のない男

一連の事件を巡る東電の対応は、決して褒められた話ではない。清水社長もどこまで状況を掌握しているのか分からないところがあつたといわれる。

しかし、「全面撤退」はなかったのである。最終報告書でもそうなっている。もし仮にあつたとしても、こんな人格否定まがいの発言が許されるわけがなかろう。東電にしてみれば、いわれなくても命を懸けてやっている。特に現場はそうだ。

不幸にして取り返しのつかない事故は起こったが、電力マンは豊富な電力の供給を通じて戦後日本の繁栄を支えてきた誇り高き人々だ。それを頭ごなしに卑怯者だと断じられては、それこそ立つ瀬はない。しかも、相手は民間企業だ。

文字どおり、命を懸けて最前線で頑張ってきた福島第一原発の吉田昌郎所長もこのときのことを「悔しい思いをした」と振り返って証言しているが、「幹部連中は死んでもいいんだ」とは何という言い草か。

菅氏は自著でも、当時のことをこう書いている。

〈撤退という選択肢はあり得ないのである。誰も望んだわけではないが、もはや戦争だった〉

〈日本は放射能という見えない敵に占領されようとしていた。この戦争では全面撤退は東日本の全滅を意味

している。日本という国家の崩壊だ〉
〈命がけで収束にあたっても実際に収束できるのか。(中略) 口には出さなかったが、私は自分の覚悟も決めていた。私に選択肢はなかった。このまま座して死を待つわけにはいかない〉

だが、本当に命をかける人間はこんな軽い記述はしないだろう。とことん品のない男である。

その後、原発事故は現場作業員の奮闘や自衛隊、消防、警察の犠牲的な活躍もあって急速に封じ込められていったが、菅政権の過剰な現場介入がなければもっとうまくいった可能性があるというのが真実なのである。だが、いまに至るも、菅氏は自らが人災の元凶だったとの自覚がない。『総理大臣として考えたこと』は、首相経験者による責任逃れとごまかしの書物である。

原子力緊急事態宣言の発出の遅れは、〈すでに緊急災害対策本部が設置されており、原発事故に対する具体的な対応が遅れたとは特に思っていない〉と述べている。

また、ヘリコプターによる現地視察の強行も〈私はもともと「現場主義」的なところがある。リーダーは自分の眼で確かめ、判断を下すべきだと考えている〉と居直っている。

あまりに下種な態度

東電の「全面撤退」については、こういう。

〈吉田所長はじめ現場が最後まで頑張る覚悟であったことはその通りだろうと考えている。しかし、東電本店では、福島第一原発の要員の大半を第二原発に避難させる計画が話し合われていた。私は(枝野、海江田)両大臣が「撤退の申し出」と受け止め

た以上、それを前提に撤退させないための行動をとったのである」

全面撤退を前提に東電に乗り込んだのだから、そうでなかったならまず勘違いを謝罪すべきだろう。それをせず枝野、海江田両氏に責任を押し付けるとは下種^{げす}というしかない。

このどこまでも心根の卑しい菅直人氏を絶賛して、脱原発を叫ぶ菅政権の元閣僚たちも同罪だ。

福山氏の『原発危機 官邸からの証言』は、本全体が菅首相は東電の全面撤退要求を阻止することで日本を救ったとの視点から書かれている。

プロローグの書き出しも、東電の清水社長が菅首相に呼ばれ、首相執務室に入ってきたシーンからである。

このなかで福山氏は、東電が全面撤退など求めていなかったことについて、菅氏と同じように「東電社内の意向がどうあれ私たちに伝わってい

るメッセージは明確な「全面撤退」であり、私たちにとってはそのみが重要だった」と強調している。

また、清水社長が菅首相の東電本店での罵詈雑言について、国会事故調の参考人聴取で「死力を尽くしている現場の社員たちは打ちのめされたような印象だったと思う」と証言したことに反論。

〈文字通り危急存亡の事態に直面した最高指揮官の言葉だった。そのときの官邸が抱いていた「このまま原発の状態が悪化すれば東日本全体がだめになるかもしれない」というせっぱ詰まった危機意識を当時の東電側が持っていないかったとしたら、それはそれで深刻な問題である〉

被災者見殺しを断罪せよ

だが、分かってないのは福山氏のほうではないか。

どんなときでも沈着冷静に行動し、国民の生命財産を守るのが国家のリーダーではないか。それを、まるで自らが一幕の劇のヒーローのように感情的に振る舞って、かえって現場を混乱させるなどあってはならない。

だが震災、原発という国民の危機すらも絶好の人気取りの舞台と想って行動してきたのが、菅政権の本質だったのではないか。

細野氏の『証言 原発危機500日』はこの東電撤退問題について、こう絶賛する。

〈菅さんというのは〉個人しか見ていない、国家を見ていないと批判されることあるんだけど、私は違うんじゃないかと思っています。あの場面で菅総理だけはまったく迷わなかったんです。

「東京電力の撤退はありえない」と。

つまり、客観的な情勢だけを見れば、個人を犠牲にしても国家を守らなければならぬという判断を、総理は瞬時に下したわけです

だが、これまた間違っている。感情に任せて権力を振り回す一方で、被災者を見殺しにしてきたのが菅政権なのである。国家、国民などここにあるのか。

菅政権の主要メンバーによる福島原発事故の本を通読して最も驚いたのは、「被災者」「住民避難」に関する記述がほとんどないことだった。

その多くは、ベントや海水注入、東電の撤退阻止、それに脱原発といった問題で、いまでも十五万人の人々が自宅に戻れない現状については全くと言っていいほど触れられていない。

原発事故による避難指示は、菅政権の指示で三キロから十キロ、二十

キロへと拡大されていった。避難住民にとって、これがいかに苦難に満ちたものであったかについては少し考えれば分かる。

国会事故調の報告書によると、住民避難の様子はこうだ。

「住民の多くが、避難指示が出るまで事故の存在を知らなかった。また、事故が発生し、被害が拡大していく過程で避難区域が何度も変更され、多くの住民が複数回の避難を強いられた。周辺住民の多くはほんの数日間の避難だと思って「着の身着のまま」で避難先に向かった。

しかも指示は三キロ圏、十キロ圏、二十キロ圏と拡大され、そのたびに住民は不安を抱えたまま移動した。そのなかには後に高線量と判明する地域に、知らずに避難した住民もいた。二十キロ圏の病院や介護施設などでは、避難手段や避難先の確保に

時間がかかったこともあり、三月末までに少なくとも六十人が亡くなるという悲劇も発生した」

菅首相が現場に無用な介入を繰り返して、東電幹部を怒鳴りつけていた間にもこれだけ多くの人が途方に暮れ、亡くなっていたのである。

こうした現実への忤怩たる思いや被災者への憐憫の気持ちはないのか？ 菅氏や菅氏の子分がいくら演出、脚色しようとも東日本大震災、福島原発事故で被災者を見殺しにした事実は消えない。

総選挙は、いまでも続く重い現実に眼を向けず、新しい「脱原発」に逃げ込む民主党政権を裁く絶好の機会である。

やまぎわ すみお
一九五〇年山口県下関市生まれ。産経新聞で首相官邸キャップ、外務省キャップ、ニューヨーク支局長などを経て退社。著書に『これでも朝日新聞を読みますか？』『それでも中国と付き合いますか？』（ワック出版）などがある。

山際澄夫氏の『民主党政権で日本は滅びる』小社より好評発売中！